



ドイツ最東の町ゲルリッツ

作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

古い町特有の空気に包まれて

ゲルリッツはドイツで最東に位置する人口5万5000人ほどのこじんまりした町だ。ヴィア・レギア(王の道)という主要街道の交易場として、1300年ごろから発展し、最盛期は16世紀。ヴィア・レギアというのは、モスクワおよびキエフを起点とした道で、ゲルリッツを抜けた後はライプツィヒを通り、最後は延々と、キリスト教の三大巡礼地の1つであるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラまでつながっていた。

ゲルリッツの特産物で特に有名だったのが織物で、その取引で富を蓄えた豪商たちが、競うように堂々たる居を構えた。空襲を受けていないおかげで、それらの多くが今もそのまま残っており、多くの映画のロケ地ともなっている。

どうしても行ってみたかったそのゲルリッツを7月の終わりに訪れた。歩いていると、しっとり落ち着いた古い町特有の空気にすっぽりと包まれてしまう。

町の東側をナイセ川が流れ、橋を渡った対岸はポーランドのズゴジェレツというさらに小さ

な町だ。しかし、戦前まではこの対岸一帯もドイツで、ズゴジェレツはゲルリッツの一部だった。つまり、当時はゲルリッツの町の真ん中を、ナイセ川が流れていたのである。

当事者の頭越しで決まった国境

1945年5月7日、敗走中のドイツ軍は、ソ連軍が追って来られないよう、ゲルリッツにかかっていた7本の橋を全て爆破したという。もっとも、ソ連軍はすでに4月にエルベ川に到達し、米軍と歴史的な邂逅(かいこう)を果たしていたのだから、全ては遅すぎた。ドイツの無条件降伏は橋の爆破の翌日の5月8日。

ナイセ川というと、世界史に出てきたオーデル＝ナイセ線を思い出される読者も多いだろう。第二次世界大戦中、ポーランドはドイツとソ連(じゅうりん)に蹂躪(じゅうりん)され、国が消滅してしまっていたこともあり、連合軍にとっては、戦後、ポーランドが復活したら、ドイツとの国境をどこにするかということが重要な案件だった。そこで、戦争がまだ終結していなかった頃から協議が重ねられたが、チャーチルとスターリンの意見が対立して決まらなかったという。



ポーランド側から見たナイセ川と国境の橋。その背景に見えるのはペーター教会



ドイツ側から橋を撮ったもの。橋の両側の物々しい監視カメラが印象的